

み込むものであります。私は子供の遊戯の種類は知りませんが、例へば綱引きのやうなものやバスケット・ボールのやうなものでも、自分一人でやるばかりでなく、他人と協調協力してやらなければ、到底勝つ事が出来ない、と云ふ精神と同時に、自分が一人でもどうしてもしなければならぬといふ義務、責任、——義務責任といふ言葉の意味はわからなくとも、その内容——を頭にしみ込ませることが出来ます。

私は、中學、高等學校、大學時代に選手をやつてゐました經驗上、現在でも、色々相談し、共同して仕事をする場合に、昔やはり運動をやつた人間が、共同することがやりよいと云ふ事から考へついで、小學時代から運動の際に共同の精神を養つて置いたならば、種々な相談會、會合の時に、議論ばかりして内輪もめしては、會の事業が何一つとまとまつて出来ないと云ふ今の日本人の一大缺點が、多少でも矯正する事が出来ると思ひます。

○どせう屋

夏の夕、山の手のとある家に、どせう屋が荷をおろ

して、どせうをさき始めました。近所のやつちやんと進さんと親子さんがすぐにかけつけました。三人は竿にあげられた魚、狙の上におどる魚、どせう屋の手につかまる魚にも次々にいそがしく眼をうつしてゐましたが、その中で三人の眸はどせう屋の手にあつまりました。

「あら、さらされてしまふわ。」

「いたいだらうね」

「やあ、ちゆうつて泣いてるよ。」

片唾をのんで見てゐる三人の口からは時々かういふ言葉がもれました。

どせうはどん／＼出来てお皿に車形にならべられて行きました。親子さんは面白くてたまらないといふ様に見つゝけてゐましたが、やつちやんと進さんは、ふと、少しはなれて下してあつた桶の中にあるどせうに氣がつかしました。たちまち四つの小さい手はその桶に亂入しました。濫い手をきらつて、どせうがにげまはるのが面白いので矢鱈につかみ始めました。

しかし、どせう屋のをぢさんは少しも氣がつかずに、せつせと割いて、次々に皿へならべてゐました。